

やまぎん

アジアニュース

平成 30 年 8 月

●釜山支店Tel010-82-51-462-3281 ●青島支店Tel010-86-532-85766222 ●大連支店Tel010-86-411-83705288
●香港駐在員事務所Tel010-852-2521-7194



【香港駐在員事務所】

中国のシリコンバレーと呼ばれる「^{しんせん}深圳」について

1. はじめに

近年、中国国内の件費が高騰し、特に沿岸部の大都市は「世界の工場」としての役目を終え、「世界の市場」へとその役割を移していると言われています。日本から中国（広東省）への視察において、全体として件数は減少していますが、「深圳」だけは沿岸部の大都市でありながら、逆に最近日本からの視察が増えています。その視察目的は「中国のシリコンバレー」、「ハードウェアのシリコンバレー」と呼ばれ、「シリコンバレーの 1 ヶ月は、深圳の 1 週間」と言われるまでになった深圳の実体を調査することです。

香港が中国本土と陸続きで接している都市が広東省の深圳です。香港からは電車で約 1 時間、バスやフェリーでも簡単に行けます。地域としては古くからの南方部族の居住地として中国の『史書』にも記載があるようですが、歴史上で大きく変貌を遂げたのは 1980 年に改革開放路線を採用した鄧小平氏の指示により経済特区に指定されてからになります。

「世界の工場」と中国が呼ばれた時期に、深圳も安価な労働力を背景に製造業を軸として大きく発展しました。今や世界でも有数の企業となった、インターネットサービスや WeChat の「Tencent」、携帯端末の「HUAWEI」「ZTE」、電気自動車の「BYD」、ドローンの「DJI」などが深圳に本社を置いています。また、台湾最大の企業である「鴻海（ホンハイ）精密工業」の大規模な製造拠点もあります。

深圳市統計年鑑によると 1980 年末時点の深圳の常住人口は約 33 万人でしたが、2016 年末時点では約 1,190 万人に達しました。36 年間でこれほど人口が増えた都市は世界でも例がありません。また、深圳は移民が常住人口の約 95%を占める移民都市で、平均年齢が 34 歳と若いのも特徴です。



2. 中国のシリコンバレーと呼ばれて

香港から深圳へ電車で向かうと香港側国境の手前で線路が二手に分かれており、出入国審査は「羅湖口岸」または「福田口岸」のいずれかで行くことになります。その羅湖口岸と福田口岸のちょうど中間辺りに、「華強北（ファーチャンペイ）」という世界最大の電気街と言われる商業区があります。東西約 2km、南北約 1.5km 四方の区域に、大小の商業ビルが立ち並び、その中には各種の電子部品を扱う店がひしめき合っています。1988 年に日本の秋葉原をモデルとして整備が開始されましたが、今ではその規模は秋葉原の 30 倍とも言われています。

日本からの視察団が決まって訪問する場所ですが、実際に訪れると、家電量販店が多くアニメショップなども並ぶ秋葉原と違って、華強北はプロ向けの電子部品街であるということがすぐに分かります。あらゆるサイズ・種類の電子部品が、あたかもデパートの化粧品売り場のような店の店頭で売られており、電子部品で揃わないものはないと言います。既に華強北をご存知の方は、「山寨機（シャングジャイジ）（山賊品）」という言葉もご存知かもしれません。山寨を中国語辞典で調べると、（盗賊などが住む）山砦や、周囲に柵や堀を巡らせた山村と記載されています。



中国国内ではそれが転じて、今では山寨機は海外ブランドの携帯電話やノートパソコン、IT機器などを真似て作った模倣品を指す言葉となっています。実際今でも華強北では山寨機を製造するために必要な部品が簡単に揃うため、本物の数分の一の値段で山寨機が大量に売られています。中にはデザインが本物と見分けがつかず、本物にはない機能がプラスされているものもあるというから驚きです。知的財産権の侵害は大きな問題ですが、山寨機の製造が深圳全体の技術力と応用力を底上げし、技術開発にも繋がったことは間違いなさそうです。



現在の深圳が「中国のシリコンバレー」、「シリコンバレーの1ヵ月は、深圳の1週間」と言われている所以はこの辺りにあると感じました。何か試作品を作る場合、例えば日本や欧米では、必要な電子部品等を発注し全てが揃うまでには、輸入する期間も含め何日かかるか分かりませんが、深圳であれば早ければ当日にも揃えることができるのです。また、各部品について仕様を変更したい時なども、相応の技術力と応用力を持った部品の生産者が近くに居るため細かな対応がすぐに可能というわけです。

深圳では労働集約型の製造業は人件費の高騰とともに大企業しか成り立たなくなっていますが、高速且つ少ロットで製品が製造できる場所として、世界各国のアイデアはあるけど資本力のないスタートアップ企業や、自社製品にイノベーションを起こしたい企業から注目されているのです。

実際に私が訪問した華強北の商業ビルは、1階から10階までが各種の電子部品街となっており、12階にはスタートアップ企業などが月払いで利用できるコワーキングスペースが設置してありました。コワーキングスペースはオープンスペースとなっており、3Dプリンターや製造に使う器具などが自由に使えるようになっています。更にそのコワー



ワーキングスペースは「Tencent」や「HUAWEI」などの大企業や投資会社がバックアップしており、利用者のアイデアや製品、ビジネスモデルが認められれば、技術面や資金面で支援を受けることも夢ではありません。

深圳は、世界で最も短期間にユニコーン企業（企業評価額10億ドル以上の非上場ベンチャー企業）が生まれている場所となっています。

3. 終わりに

先日、深圳で開催されたブロックチェーンに関するセミナーに参加する機会がありました。中国では既に「仮想通貨」は禁止されているはずなのに何故、という思いで参加しましたが、ブロックチェーンを用いた仮想通貨以外の新たなビジネスの可能性を探るものでした。後からこのセミナーの参加登録者は香港からの参加者も含め 900 人を超えていたと聞き、お金になりそうなビジネスに対するアンテナの高さと食欲さには凄いパワーを感じました。



【参考文献】

- ・ 深圳市統計年鑑 2017
- ・ Wikipedia「深セン市」
- ・ 中国語辞典-Weblio 日中中日辞典「山寨」